

渋沢史料館で渋沢栄一先生から学んだこと

開倫塾

塾長 林 明夫

1. おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。
2. 私は、9月27日(金)に飛鳥山に行ってきました。東京の JR 王子駅の横にある「飛鳥山公園」という桜の名所です。何をするために行ったかといいますと、渋沢栄一さんという明治時代に活躍した素晴らしい社会事業家の方を記念して作られた渋沢史料館を見学するためです。一人ではなく、足利商工会議所の皆様を中心に 20 名ぐらいで組織する「足利学校論語研究会」の会員の一人として行ってきました。
3. 足利学校は、中世に儒教、つまり孔子の教えを広めた論語を盛んに勉強した所です。足利市では今でも学校教育の中で児童・生徒の皆さんが、また社会人の方々も論語の素読をして、自分自身の人格を磨いたりとか、特性を磨いたりしながら、世の中のためになるにはどうしたらよいかということを目指しています。足利市の商工会議所の中には「足利学校論語研究会」というのがあり、そこで論語の勉強をしています。
4. 明治時代の偉人である渋沢栄一さんは「論語と算盤」という本を書かれまして、経営の中に論語を用いたり、国づくり・地域づくりの中に論語の考え方を取り入れて会社を起こしたり地域を起こしたりした方です。また、御承知の方も多いと思いますが、銀行をつくったり、鉄道をつくったり、船の会社をつくったり、証券会社をつくったり、学校をつくったり、さらにはハンディキャップを負っている方の施設をつくったりして社会福祉にも随分貢献されました。全部で 500 以上のいろいろな事業や会社を起こした方として非常に有名です。91 歳まで御活躍なさったのですが、亡くなる何か月か前には日本女子大学校、現在の日本女子大学の校長先生に御就任なさって、死ぬ間際まで女子教育に尽くされたという方です。
5. 渋沢史料館には、91 年に及ぶ生涯とその間に携わった様々な事業、多くの人々との交流を示す資料が展示してあり、国の重要文化財になっています。そこに行き、本当に素晴らしい勉強をさせていただきました。
6. 私が渋沢栄一さんから学んだことは、企業人としての社会的使命といいますか、志の高さと実行力です。渋沢栄一さんが 91 年の生涯をかけて貫いた努力は、次の 3 つの点にあらわれていると言われています。1 つは、株式会社です。会社という組織を初めてつくったのは渋沢さんです。渋沢

さんは幕末・明治維新のころにヨーロッパに行かれて、ものごとを成し遂げるには会社という組織をつくって、みんなから少しずつお金を集めて社会のために使うのが一番尊い仕組みだとお気づきになり、日本に株式会社という組織をつくりました。そこに多くの人々の知恵と資金を集めて、人の道(道義)に沿った活発な活動を展開して豊かな社会を実現するということを考えられたのです。何のために会社をつくるのかということに対しては、「利益追求のために始めたものは一つもない。すべて社会の発展のためだ。人々のために活動するのが会社である」とお答えになったと言われています。銀行の仕組みもそうです。銀行をつくったのも、利益の追求のためではない、すべては社会の発展のためだということです。「半沢直樹」というテレビドラマを見た方もいらっしゃると思いますが、もしかしたら半沢さんも銀行は社会のためにあるのだという考えであったかもしれませんね。その原点を作ったのが渋沢栄一さんです。

7. 2 つ目は、国境を越えて自由で活発な市場経済を実現して人類全体を豊かにするという考えで、貿易や海外との交流を非常に盛んに進めたことです。市場経済の中で活発な活動が進みますと、中には取り残される方も出てきます。市場経済の中で取り残されがちな弱者を支援する社会福祉や、社会の基盤として大切な教育にも力を入れるということで、様々な社会救援施設や学校もつくられました。一橋大学・東京女学館大学・日本女子大学も渋沢さんが力を入れてつくられた大学だと思っています。

8. 3 つ目は、一番有名な考え方の一つとして、道徳と経済は同じだという「道徳経済合一説」を唱えたことです。これは、企業を発展させて国を豊かにするには、論語を拠り所(よりどころ)にして道徳と経済の一致を常に心掛けなければならないという考え方です。国の発展を本当に望むのであれば、国を富まさなければならぬ。それには科学の進歩と商工業の活動に拠(よ)らなければならぬ。商工業に拠るには会社という組織が必要で、株式会社を経営するには強固な道徳、つまり道徳に拠らなければいけない。道徳の基準は論語に拠るしかない。このように、道徳と企業経営、経済を一つに考えて一体なものとして行うことが大事だと唱えました。このような考え方を日本に広められたのが渋沢栄一さんです。

9. 渋沢史料館には、青淵文庫(せいえんぶんこ)という図書館や晩香廬(ばんこうろ)という建物があります。晩香廬は、菊の花には晩節の香りがある、菊の花は最後の頃に非常にかぐわしい香りを放つ、つまり遅れて節を守るような香りがするということからきていともいわれています。渋沢栄一さんは、菊が最後にいい匂いをさせるように晩節を清くということで、91 歳まで「清く正しく美しく」の考え方を持って過ごされたようです。このように、青淵文庫という図書館を持ったり、内外の多くの方々と歓談を交えながら交流する晩香廬という談話室をつくられたりしながら非常に素晴らしい一生を終えられたということで、私も非常に勉強になりました。

10. JR 王子駅の近くの飛鳥山に渋沢史料館があり、そこで渋沢栄一さんについて勉強できますので、皆さんも東京に行かれましたら、ぜひお訪ねになっていただければと思います。